吉井 香織 令和 3年度 学校評価総括表 EΠ 自ら学ぶ意欲と豊な心を持ち、たくましく生きる子どもを育てる I 学校教育目標 Ⅱ 前年度に残された課題 Ⅲ 本年度の重点課題 IV 来年度に残された課題 ○多様な考えを尊重して学び合うために、話し合い活動を充実させ 1、規範意識の向上 、規範意識の向上 1、が通過機の内上 (力友だうや先生、家の人や近所の人に、自分から進んで挨拶する。 (②約束やきまり、マナーやエチケットを守る。 (③清掃活動や環境美化活動にまじめに取り組む。 ①集団の中にいても「善いこと」と「望ましくないこと、してはいけないこと」がぶれない子ど ○家庭でゲームに費やす時間を読書活動に充て、本に親しむ。○学習の基礎基本を身に着けるため、また、探究的発展的学習推進の ②身勝手な理由ではぐらかしたり嘘を付いたり、その場をしのいだりせず、自分の言ったこ とやしたことを素直に認める子どもを育てる。 ③正しいことを正しいと評価して、それを臆せず表出し、善いことや正しいことでつながる集 ため、授業でタブレット端末を有効に活用する。 〇タブレット端末を生かした家庭での自主学習を推進する。 2、主体的・対話的で深い学びの推進 ④自分の考えを説明する力を身につけ、他の人と関わりながら学習を進める。 団を育てる。 2、主体的・対話的で深い学びの推進 ⑤授業や家庭学習でタブレット端末を活用した教育活動を推進する。 ○時間やきまりを守り、まじめな態度で落ち着いた学校生活を送る。 ⑥地域と協働して子どもの学びを支える。 ⑦読書に親しみ、感性を磨く。

-	[2]具体的達成目標と評価指標 [3]自己評価			[4]外部アンケートの分析			1	[5]自己	伊伍		[6]学校関係者評価
_	 体的に、何を、いつまでに、どの水準まで、		中間評価	児童生徒アンケート		保護者アンケート		最終評価(成果と課題)	課題の改善策等	評価者。	10人
1] 評価項目	具体的に、何を、いつまでに、との水準まで、 数値化		評価日 7月15日	実施日 6/30 と 12/2	実施日			取続計画(成来と味道) 評価日	DWGV-0VEX-A	評価日	2月28日
	公表日	-	公表日 8月1日			公表日 12月16日		公表日		公表日	3月3日
	☑ ホームページ	平	公表方法 2 ホームページ	☆ ホームページ	_	■ ホームページ	評		☑ tームページ		3月3日 ☑ ホームページ
一种題	_ ' ' '	定	□ 文書配布			_	定	公	■		
項番	公表 ☑ 文書配布			公表 ▼ 文書配布	440	> 1 mm mo - 1 -		表			文書配布
目写	方法 □ 説明会実施		□説明会実施	方法 □ 説明会実施		□説明会実施		方法	D 税明会実施		□ 説明会実施
_	□ その他		□ その他	□その他		□ その他			一その他		□ その他
1	●友だちや、登下校を見守ってくださるボラン ティアや保護者への挨拶ができるよう。学校で指 導するとともに、家庭への啓発活動を行い、「できた」「おおむねできた」と回答する子どもを7 0%以上にする。	A	5月は今までの生活目標を変更し、4月と2か 月連続で、「あいさつをしよう」に設定した。新 学期で児童も教職員もあわただしく毎日を 送っていたこともあり、生活目標が浸透せず、	の方は、児童の挨拶の様子を「明るい」「元 気」と評価している。	ていると もの「で 差がある ・子ども ち」「先生	は挨拶する対象は「家族」「友だ 主」で、近所の人は進んで挨拶す	В	・全教職員が挨拶や返事の指導ができたと答えて いる。特に1年の節半は、見守りポランティアへの 朝と帰りの挨拶、後半は職員室への入室時の挨 拶について重点的に指導した。しかし、指導の効 果が明らかに表れているとは言えない。	- 職員室入室時の挨拶の決まりについては、来年 度も指導のポイントにしたい。児童は大儒―人で 職員室に入室するので、挨拶をするには勇気が 必要である。しかし、そのような場に身を置き、一 人ででもきちんと挨拶ができる子どもに育てて いこうと思う。	う。コロナイない環境が ・保護者や ・手本になる	あいさつする子どもはこの2年間で減少したように思 橋で、積極的に声を出す子が少なくなり、大声を出せ だこうした事態を招いているのかもしれない。 先生にも挨拶をしない人がいるので、自らが子どもの ようにしなければならない。
2	●チャイムが鳴れば遊びをやめる習慣を身に着けさせる。学校生活の約束やきまり、マナーやエチケットに関する指導を、必要だと感じた時に受け持つ授業等で行う。	С	則もきまりも忘れてしまう児童に対し、どのよ うに指導するかを模索している教員とあきら	員に対する挑発的態度が収まらないので、 周囲の児童がストレスを抱いている。	した保護 ゲームを ブレット いる約束 姿がある		Α	「できた」「概ねできた」と答えた教員は90.0% 、前期よりも減少した。規則やきまりを守れな い子どもの多くは多人数で行動し、反抗的態度を 友だちみんなでとる。地域ボランティアや保護者 の見守りがあればルール優りもなくなる。教職員 がめげることなく指導することが大事である。	・しつけや決まりの順守については家庭教育と重なるところもある。保護者の支援を仰ぎ、許すところもある。保護者の支援を仰ぎ、許すところと許さずに指導するところや、約束を破った時の対応について、学校と家庭で共通認識を持ちたい。	の指導があ ・厳しい指 有効だと思 ・教員の指 れたことは	導に素直に従えない子どもでも、子どもの頃に言わ は大人になって思い出すものであり、指導を続けてほ
3	●家庭でも学校でも身の回りの整理整領に励め、児童の自己評価と保護者の評価、教員による評価に大きな差異がないようにし、学校と家庭が一体となって取り組みを進める。	С	- 92.9%の教職員が「身の回りの整理整領に 気を付けさせ、落とし物やなくしものを減らす 工夫ができた」と答えている。どんな工夫をし たのであろうか。交流する場が必要である。	・「整理整頓ができている」と回答した児童 は前期80.3%だったが、後期には 74.6%に減少した。忘れ物や落とし物を なくす一番の方法は、名前を書くことであ るが、増え続ける学校の落とし物には名前 が書かれていない。	と非常に ケートと 「できた	た」と回答した保護者は47.3% こ心配な数値である。児童アン には大きな差異があり、保護者の ご「できていない」の判断基準と のそれに大きな差異がある。	Α	・整理整頓や落とし物や無くし物を減らす指導が できた」「概ねできた」と答えた教職員は、前期 より減って81.5%であった。しかし、それは児童 ができるようになってきたからだと思われる。下 校後の昇降口の戦衛の乱小や落とし物箱の中身 を見ると、そのことがよくわかる。	・物を大切にすることについては、継続して指導する。また、タブレット端末の破損を防ぐため、授業中は札上を整領し、特に水筒は学級で置き場を決めて保管させる。	い。落とし ・持ち帰る。 る。体操服 くる。物が 当然だ。荷	自分の身の回りを見てから帰る習慣づけをしてほし 物が多い子には先生が手助けして習慣づけをする。 荷物が非常に多い。水尚と学童がッグは毎日持って来 と給食者、上靴は金曜日に持ち帰り、月曜日に持って 教室にあぶれると落とし物や恋れ物が多くなるのは 物を減らす工夫はできないのか。
3	●まじめな清掃活動について、発達段階に合わせて児童自らがめあてを設け、その達成に励む 児童を70%以上にする。	В	事を熱心に行っており、指導の成果があったと 思われる。	・前期は89、3%、後期は88、3%の児童が 「真面目に掃除をした」と答えている。築 43年の本校の廊下や教室は、一生懸命掃 除をしてもなかなかきれいにならず、掃除 のやり甲斐がないようである。一方、高学 年男児の一部は、掃除をしていない姿を全			Α	・96、4%の教職員が指導できたJI最れ指導できたJと言っている。自主的に運動場のゴミ拾いをしたり、落ち葉拾いをする児童もいて、清掃指導の浸透を感じる。	- 真面目に子どもたちが掃除をするにもかかわら 、 トイレや廊下に靴の汚れがこびりついたりし みついたりしている。「きれいになった」と子ども が感じれば、清掃活動への意欲も増すと思うの で、マットで靴の汚れを取るか、年に一度は業者 による清掃をするかを検討する。	けてもらい	
4	●授業中に自分の考えや思いを他の人に提示する機会があり、その意見に対して理解を得られた経験のある児童を増やす。	В	 自分の意見をまとめさせて子ども同士で交流する機会を設けたという教員は82.1%だが、コロナ禍で、どのようにして交流をする場を設定したのか、教員同士で学び合う機会が必要だと思われる。 	自分の考えをみんなの前で発表で来たか どうかを問う質問で、前期は68.0%、後 期は63.5%の児童ができた」と回答して いる。友だちの考えに対して賛成や反対の 意見を言えたかどうかについては、前期 76.7%、後期74.6%の児童ができた」	ようにな で、多く	が積極的に自分の意見を言える ⋧ったと答えた保護者は79.2% の保護者が子どもの話す力の向 ひている。	В	・前期自己評価より10ポイントほど肯定的回答が 下がった。子ども同士での対面での交流が制限 され、活発に意見を交わし合う場がなかなか設定 できず、子どもが自分の考えや意見を持っていて も、それを協議して深め合うことができなかった ためだと考える。	・ロイロノートを活用して自分の考えを書き込ませ、それを大型ディスプレイに映して学級の児童 全員で共有する場と授業中に設けるなど、発表 の声を聞く活動から、それを「見る」活動へと交 流や協議のスタイルを変える。	子があまり し、保護者に ・年度末の参 ことを学級。	ぐ参観はリモートで視聴したが、子どもの教室での学習の様 にも暮くし、意見交流ができていない状況だった。しか は子どもの普段の様子を知ることができた。 砂観はこの1年の自分の成長を発表するものだった。できた あんなで喜び合うでして、見ていた保護者も胸が熱くなっ 乱はできなかったが心の交流はあると感じた参観だった。
(5)	●教員のICT活用能力を高め、タブレット端末を 活用した授業や、eライブラリーを使った家庭学 習を週に2回ば行う。	В	員の差も同様である。個人よりも学年集団での	ままるい タブレット従来での家庭学習け	た家庭等 ている。 持ち帰る ないかと	%の保護者がeライブラリを使っ 学習を子どもはしていると答え 本校では毎日タブレット端末を るため、もっと活用できるのでは と考える。	В	・eライブラリの活用は70.4%になった。2学期 早々に実施した校内研修や11月から配置された ICT支援員により、使い方が分かる教員が増え、 授業中や学紙閉鎖中のオンライン学習で積極的に 使用するようになったためと思われる。	・継続的に使用する機会を設けることが大切である。学年や学校全体で「eライブラリによる家庭学習の日」を設定することも考えていきたい。	かる。タブ いる。GIG している。	ご機器の操作技能の向上はオンライン授業を見て分 レット端末による配信では子どもの発表の場を設けて、 はスクールの進展はここ1年間で目を見張る結果を残 かったと思うが、研修を通してさらなる向上を目指し
6	●学校運営協議会を年3回開催し、子どもの成長を軸として意見を出し合い、地域と学校が相互に連携し、協働して行う様々な活動を検討する。	В	・1学期中は会合を2度開いた。しかしながら腹 架症予防対策のため、地域と学校が集える機 会が少なく、子どもの実態が分からないとの声 がある。新しい取組や企画で地域と交流できた 学年は半数しかない。	地域の方がゲストティーチャーとして授業 を支えていただく機会が多かったためだ と考える。	して教育 いる。特 や調理で いただき もいた。		Α	るため、小学校が抱える問題や課題ばかりの協議 はできない。そこで、民生委員代表や協議会の会 長、地元教育委員や自治会長に相談することが多 く、学校運営に力添えをいただいた。	だけではなく、電話等でも子どもたちの様子を定期的に知らせ、学校の取組に意見をもらえる体制を維持する。	り受け止め ・時間的に く思う。 ・本年度は 謝の声があ	
7	●木に興味を持たせ、学校図書室の年間貸出冊 数を15000冊以上にする。	С		・読書タイムに繋中して本を読んでいる児 童は70.5%もいる。よって、本好きな子 どもは多いと思われる。	ていると で、本に 者の家庭 る。親が	(の56.3%が、家でも読書をし と答えている。活字離れが進む中 親しむ子どもにするには、保護 庭内読書が必要だと言われてい 「本に親しんでいれば、子どもも を読むようである。	В	・子ども一人一人がどのような本に興味を持ち、 どれくらいの誘動量なのかを知ることができて いる教員は46.4%しかいなかった。しかし、誘書 ボランティアや図書委員担当教員により、子ども たちは誘書に興味を持ち続けているように思わ れる。	- 朝の誘書タイムの重要性を教員が認識し、その 15分間が1港導する時間になるように、教員が 意識を高めて取り組む。ブックトークやおすすめ の本を紹介する時間としても活用する。	好きなこと: る学級があ ・本棚を廊下 だと思った。 ・感染症予防	:つて誘導タイムに対する先生の認識が違う。誘書タイムを をする時間とた好えて、折り紙や絵を描っ時間になってい り、指導に問題がある。 下に置いた学数があり、身近に本を手に取れるのが魅力的 、朝の誘書時間を見違してもいいのではないか。 が登り続いては新できない児童が多く、賃出冊数は2月 868冊である。
8	●子どもたち一人ひとりに向き合うことができる教育を目指し、働き方改革を推進する。就業時間やクロックアウトの時刻、定時退動日などを意識した勤務を行う。	С	- この設問に肯定的な回答をした教職員は 53/6%しかない。働き方改革の推進のため 19時がクロックアウトで、定時退動日は設定し ていない。まずは超過勤務時間45時間を超え ることがないよう働き方を自覚し、優先順位を つけて仕事に取り組ませたい。				А	-89,7%の教職員が「できた」「腐ねできた」と回答している。45時間以上の超過勤務者は月平均一桁になり、昨年度から比べて大幅に減少した。若手教員が仕事の優先順位をベテラン教員から学ぶ様子も見受けられ、働き方改革への意識が高まっている。	- クロックアウト時刻は守れるようになってきた。 今後は管理職だけでなく、同僚同士で声をかけ て退動できる雰囲気を作りたい。また、定時退動 日の設定についても考えたい。	い。今の教 教委はして	満杯の働き方ではなく、余裕とゆとりがある魅力的な